

施帯文石（亀石）展開図作成と考察

臼井 洋輔

はじめに

楯築遺跡の上にある施帯文石（亀石：江戸時代には白頂馬龍神石とも呼ばれた）は、吉備津神社の末社楯築神社の御神体である。これは昭和56年6月5日指定の重要文化財（考古資料）ではあるけれど、この施帯文石に施された文様が何の目的で作られ、何をイメージして彫り表したのかについては、全く謎のまま今日に至っている。

謎がそこに存在する限り、それを究めてみたいと思う。もちろん自分の挑戦で全てが解決するわけではない。自分としてできるところまで迫っておけば、成果の大小とは関係なく、後に続く研究者がそこから少しずつ更に前進させ、何時かはきっと謎がさらに解け、やがて全体像への前進へ繋がるはずである。

そのためにもまずは基礎データとして、この直弧文の源流と云われている施帯文石の全面展開図作成とそれに附随した若干の考察をしておくことが、目下の使命と考えている。

実はこの施帯文石は「楯築遺跡」の、当初のものであるストーンサークルで囲われた中にぽつんと建っている小さな祠の中に祀られていた。現在はこの施帯文石はやや南のコンクリート製の宝物庫の中に嚴重に保管されている。^{【註1】} **【写1】** **【写2】**



写1 楯築ストーンサークル<真南より>



写2 施帯文石が納められていた祠

この弥生時代末期におけるわが国最大の楯築墳丘墓に葬られた吉備の王墓に相応しい墓壙が、1976年から岡山大学考古学研究室の故近藤義郎教授によって発掘された。その結果、全く前例のない30kg強の、目の覚めるような美しい水銀朱が棺に敷き詰められていた。

そしてその場所から、ヒスイの勾玉と瑪瑙の管玉や27個の碧玉からなる首飾り、長さ47cmの鉄剣、数百の小さなガラスや管玉製首飾りも出土した。円礫推上部からは、王位継承儀式と関わる高さ1.13mほどの大型特殊器台の破片が出土した。また北東突出部からは壺形土器も出土した。

古墳時代になると激しい階層分化の中で、富と権力の集積が起こるが、その直前の弥生時代

末期に、これ程の副葬品が出土すること自体異例のことである。そのことから、古墳時代前夜においてその墳墓の主であり、古代吉備国の権力者としての存在は格別なものであったことが十分想像される。

その他、地上の謎の施帯文石だけではなく、それと良く似た小振りの謎に充ち満ちた施帯文石が墳墓の上の円礫堆下部から出土した。何らかの葬送儀礼を経たのか、後世の人の他の儀式によるものか分からないが、100個以上の破片に砕かれた形で出土した。この地上と地下の2つの施帯文石は当然深い関係があると思われる。セットと考えられること等からも双方の施帯文石が弥生末期のものであるとの考察は、殆ど揺るがないのである。

ただこの施帯文石の時代限定が可能ではあっても、空間的には全国何処にも類例がないので、施帯文石の性格の解明は難しい。

施帯文石の存在は目下のところ、この2点と楯築遺跡から直線距離で北西700mに存在する鯉喰神社境内で表面採取された別個体である握り拳ほどの施帯文石の破片が1個あるのみである。つまりこの上なく不思議は存在し続けているものなのである。

このことから、この施帯文石研究は今もって足踏み状態であるともいえる。日本に国を作ろうとした矢先の弥生人が、何の目的でこの施帯文石を作ろうとしたのかとか、文様が何を意味しているのかは、弥生時代から遙か隔絶した今日の人間が今現在の揃っているデータで考えても核心にはなかなか近づけていない。

改めて文様や、それを作るための加工技法、加工道具を詳しく調べて見れば、その性格を知る何らかの手がかりがどこかにあるはずと思っている。

これには長時間継続的な調査、対話を要する。ところがその後レプリカが出来、それに十分向き合うことが可能となったことが幸いした。レプリカによる観察であるために、ある程度の限界があることはもちろん承知している。しかしこのレプリカはわが国の最高の技術で作られた。

そこで、この国内初の展開図の作成を実行した。考察を含めたセッションが次に考察する人に少しでも役立つなら、それだけでも十分意味があると今は思っている。

【図1 施帯文石（亀石）展開図 A3折り込み図参照】、【写3】、【写4】



写3 実物の施帯文石 重要文化財 施帯文石



写4 レプリカの施帯文石

(前提考察)

一見しただけでは皆目弥生人の制作意図などくみ取れない。日本以外にこのようなものを現

代まで使って儀式をしている所があるというのならまだしも、それもお見つかからない。^{【註2】}

それでは、弥生人に近づいてその意をくみ取れなければならないとしても、取っかかりがないと、制作意図など全くもって分かるはずはない。しかし何時までもそのまましておくわけにもまたいかない。しかしそれはある意味では、私の観察眼は何処まで迫れるかという挑戦者の意欲をそそるものでもあった。取り付く島がほんの僅かしか無くても、この謎に一度は挑戦しておきたかったのである。

(帯加工の考察)

この施帯文石は一定の幅を持つ帯状のものが、この石をグルグル巻にしているから施帯文石と呼ばれている。実は良く見ると帯の中央部ほど、帯の周囲に比べて低い。このえぐりの理由も私は当初は分からなかった。

文様やえぐりは今では、この施帯文石を作りやすくする技術の領域に入るかも知れないと思っている。形式分類で何も手がかりがない場合でも、技術の領域からひとまず迫るという方法もある。**【写5】、【写6】**



写5 えぐり加工技法



写6 えぐり加工技法

何故中央部を凹ますようにえぐり、帯の縁部に土手を設けるように、帯の両端を高めているのは何故かを考察してみよう。そこに何かが見えるはずである。

まずこの全面にギッシリ隙間なく敷き詰められたような帯を一定幅で形成しようとするれば、手順として何が必要かを考えてみたい。まずは帯幅を一定に保つ輪郭線を描いてゆくのが普通ではないかと思われる。何本かの条痕の入った線を書くだけが目的ならば、幅が一定でなくても良からう。しかしこの帯はあくまでも美しい一定幅を希求している。

もともと施帯文石の形は自然石を利用して作られたものである。これだけ繊細な線刻をびっしり刻んでいるのに、途中でこの石にスケールダウンや形状変更のために手を加えた痕跡はない。**【写7】、【写8】、【写9】**

つまり、その石の形に形状的修正を加えること



写7 自然石の形を尊重して彫っている



写8 同



写9 同

なく、原形に沿ってあくまでも帯は作られている。石を帯でグルグル巻きにする場合、まず全体のレイアウトは帯の輪郭線から作られることになるのは、この際輪郭線があくまでも重要な意味を持ち、それを途中で変えるわけにはいかなかったはずである。そのためにはどうしても帯幅輪郭線をまず最初に石に印してから彫刻する技法の必要性があったはずである。

その次にあらかじめ決めた規定数の条痕を入れて仕上げていけば最も描きやすい。帯が帯らしくくっきりするためには、帯幅内は断面的に凹面にするのが、正確に美しく帯らしくするには、一番合理的であると云うことを考えて見よう。

仮に凹帯でなく、凸帯や平面で一定幅の帯を作ろうとすると、帯の外縁が必ずしも美しく仕上がらないのである。即ち、レリーフだと、どんどん輪郭線を削り、あるいは削り直す部分が大きくなり、削り出し量が膨大なものになる。それは、弥生時代末期頃の鉄の刃物としての硬度を得るための焼入れ処理技術と硬さ維持という耐久力からみて、恐らく凸帯は避けねばならない加工技法であったと思われる。**【写5参照】**以上のようなことがまず帯作りに読み取れるのである。

(人面考察)

顔の法量タテ 17.5cm×ヨコ 15.0cm

この施帯文石には頭部すなわちヒトの顔らしきものが浮き彫りにされている。**【写10】**もちろん誰の顔なのかは分かってはくはない。この顔も当初はもっとはっきりしていたことである



写10 人面



写11 頭の反対側(尻)

う。意識的にであろうか、後のいたずらなのか、目の部分が最もダメージを受けるように叩き壊されている。さらに「頭」の反対側は常識的な意味で「尻」としなければならないが、実はここだけはお、「帯」が描かれておらず、意識的に空白として残されているのが注目される。【写11】^{【註3】}

顔の下部、つまり顎下はまるで前垂れのような表現になっている。つまり帯と理解するのなら、それはここから始まっているし、そうであれば顔を持つ蛇神か龍神の化身のようでもある。その線の数^{へび}は12本の線刻である。帯を含めて蛇神と理解するならここは首と云うことになるだろう。

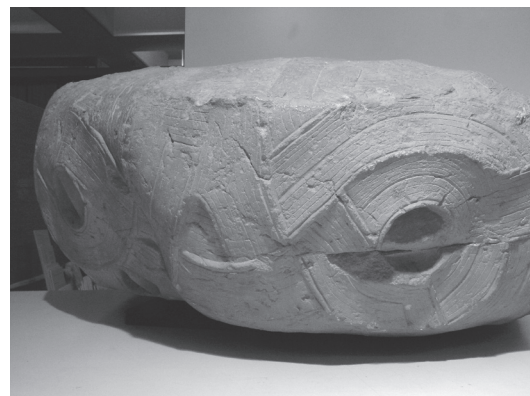
尻の左右の蛇の目（40年ほど前のテレビのチャンネル切り替えロータリーつまみのようなものをここでは一応蛇の目と呼んでおく）の周辺の渦巻きだけは何故か中央線の描き方が違って、片切刃の刃物で刻んでいる。

（帯中央線考察）

帯状の線刻は中央線だけ目立って太くしている。【写5参照】、【写12】しかも場所によって上からきさげして作る条痕であったり、片切り刃鑿で削ったようなシンメトリックでない線であったりする（作る工人が分業したのであろうか、いやいや、その場所に込めた意味が違う可能性が高い）。【写13】



写12 中央線（太溝）



写13 中央線（細溝）

（鑿痕考察）

施帯文石の裏側には鑿痕が残っている。これは決して自然の条痕ではない。ちょうど鑿ではつった痕が畳の目のようになっている。【写14】、【写15】、【写16】、【写17】、【写18】

この痕跡から、鑿への力の入れ具合と鑿の重量や鑿のヨコ幅が大凡分かる。その幅は2cm～2.5cmである。

さらに詳しく云えば、使用されている鑿には平鑿と、荒仕上げ加工の円錐形の棒ポイント鑿が使われていることも確認できる。現在でも石工の鑿はこの2本が基本である。

（蛇の目考察）

穴（蛇の目）の数	表面	5	合計 20 個
	周囲	10	
	裏面	5	



写 14 裏面（帯を作る前、ポイント鑿痕もある）



写 15 裏面（帯に溝が入っていない）



写 16 鑿痕



写 17 鑿痕



写 18 鑿痕



写 19 全体（左側が人面）

(蛇の目中央稜線、その他線刻考察)

施帯文石の蛇の目稜線はほぼ放射状になるように作っていることが分かる。**【写 20】【図面参照】**

上面の蛇の目には筋目が彫られているが、但し、頭から尻へ順に彫られている。

- ①全くないものが1つ。
- ②北西から南東の方向へ中央線があり右上の部分にその線に直角に筋が彫られているものが1つ。
- ③上述と同じ方向に径の直線があり、筋は右上が線に垂直、左は平行に彫られている。それが1つ。
- ④北東の位置から南西へ径線があり、左上、右下の線とも垂直に引かれたものが1つ。
- ⑤北西から南東へ中央線があり、筋はそれぞれ平行に走っている。
- ⑥ただ周囲と、裏との境目にある蛇の目には線刻を彫っているような、いないような不明瞭なものである。

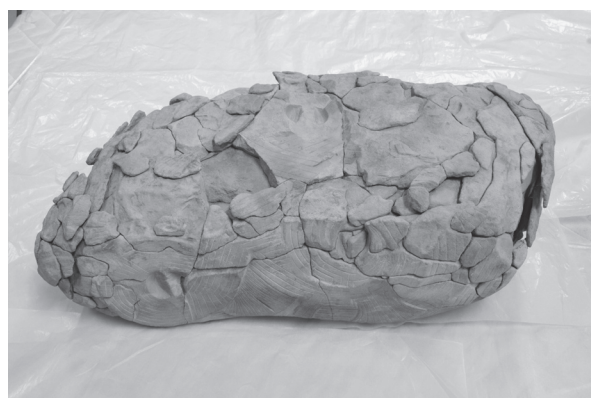
(表裏蛇の目周辺帯考察)

- ①裏側の蛇の目を取り巻く帯はみな一重渦巻きである。
- ②それに対して、周辺(側面)の蛇の目を取り巻く帯は二重渦巻きである。
- ③上側の蛇の目を取り巻く帯は二重から三重渦巻きである。^{【註4】}

小型施帯文石(亀石)【写 21】

法量 75.0cm × 32.5cm
厚み 17.5cm

表の面の蛇の目穴数	1個(はっきり分かるものだけで) ~ 2個。
周囲の蛇の目	6個 + 1個
裏側の蛇の目	2個(2個とも正確には蛇の目ではなく、半球状の穴。 裏の面に線刻はなし。



写 20 小型施帯文石

(全体考察)

この小型施帯文石はかなり砕けた状態で出土したもので、現状はそれを出来るかぎり元通りに接合復元している。

どうもそれは、石のようなもので叩いて割ったと云うよりも、火で激しく加熱して砕いたと思われる。雨か水が注がれたかも知れない。この石は火を受けて砕けたことを裏付けるように煤けた痕跡も上面等にある。江戸時代には亀石のことを龍神石と呼んでいたと云う。龍神ならば、雨乞い儀式が思い浮かぶ。当然巨大な火が焚かれるはずである。ただ円礫堆下部から出土しているで、謎は深まる。

表面の蛇の目穴数は砕けているので分かりづらい。しかし大きい施帯文石の場合、表裏の個数が同じである法則を仮に採れば2個との推測もできる。

(鑿の考察)

鑿の幅が、概ね2～2.5cmだから、大きい施帯文石と同じ人が同じ鑿で作っている可能性はある。但し、小さい施帯文石には鑿の幅が8mmのものもある。ポンチ形円錐棒鑿は使われていないようである。

(蛇の目考察)

- ①蛇の目形文様の穴の径は3cm～5cmである。
- ②蛇の目の模様であるが、上面は、南北の径線で、左はタテ筋、右は横筋となっている。
- ③周辺は2つが、南北の径線に垂直の横線が左右両側とも引かれている。
- ④その他の蛇の目は4つとも線刻がない。プラス1個分のものについては線は判別できない。
- ⑤帯の伸びていく先、つまり先端が分かるものがある。大きい方の施帯文石には先端がヒトの顔の首以外何処を探してもなかった。しかし、この小さい方の帯の端末はバチ形になって終わっている部分があり、始まりにせよ、終末にせよここが端だと思われる。また帯線の中央の線が小さい施帯文石では太くなっていない。これも両者の大きな差異である。また顔が無い点なども大型の石とは違っており、当然当時の人々の受けとめ方も違っていただろう。

(破碎痕考察)

施帯文石は中央部よりも両端部の方が激しく破壊されていることに注目したい。このことからからも破壊は、前述のように火炎を受けての剥離のようである。

細片には角張ったところが全くなく、すべて丸っぽいのである。剥がれたそれぞれの小石破片の角が摩滅しているのは何を意味しているのだろうか。

ともかくもこれだけ殆どの部分品が散逸せずに残っているのに、摩滅したようになっているのは不思議なことである。ばらけた小石をコンクリートミキサーに入れてこね回して角を落したがる如くなるのである。ばらした後に、再び集めて何か儀式でもしたのであるだろうか。このようなことから破碎直後の埋納とは考えられない。それに先立つ^{もがり}殯とかの悲しみを一身に受けとめる儀式に要した時間がかなりあったのではと云うタイムラグがありそうである。埋納と云っても棺の深さではなく、表面近くの円礫堆下方からの出土であるから、かなりの時間幅が考えられる。

おわりに

楯築遺跡頂上にある、謎に包まれた重要文化財施帯文石の文様を初めて連続展開したものが口絵に示した図である。

複雑怪奇な文様がびっしり隙間なく刻まれた、この「施帯文石」とも呼ばれる大きな石と向かい合っていると、当時の日本人はこの石に何を願い、何を託したのであるかといった精神的関心事にどうしても何時も心を奪われてしまう。しかし石は何もしゃべらない。文字のない時代のものということとも相まって、石に巡らされた文様とそれが意味する謎は、どうしても、また誰にも解けない弥生時代の最も大きな謎の一つとされたまま、この先解明されるまで後何十年、何百年かかるのであろうか。

弥生時代末期の吉備の人々の気持ちとどうしてもコンタクトしてみたいが、その仲介をなすものはこれしかない。その試みに対しては、文化財と接するときは自分自身常にそうしてきたように、モノと語ることが一番なのである。

まず相手を知るために徹底的な部分の観察と全体の把握を毎日毎日試みたものである。ここから対話が始まり、挙げ句の果てには、これまで誰も試みたことがない表面・裏面・側面文様の連続展開図を作る方法を石から教えてもらう形で成し遂げた。そして不要なノイズを一切省いて作図し、謎解きに一石を投じることにしたわけである。これまで迫り続けて分かったものとは何か、今までの見解に前進が図れたか否か。分かったことを細部を離れて少し紹介したい。

精細に観察する過程で、この施帯文石はさらに色々なことを語り始めた。これほど硬い大きな石にシャープな線と鏡のような帯面仕上げを鉄の鑿で彫って仕上げていくのは、当時の石材加工技術の水準も高いが、並大抵の作業ではないはずである。

奈良時代に世界最大の木造建築東大寺を作った時のように、弥生時代最大の楯築墳丘墓造営とセットとしてのこの施帯文石の製作は、この地域、この時代では大きな意味を持った大変な作業であり、行事であったと思われる。それは大仏建立に匹敵するような相当大きな国家的プロジェクトであったかも知れない。刃物にしても、設計とか計画性にしても、クニの運営と思想を背負って当時最先端の技術が使われて誕生したのは間違いない。

渦巻き的位置と帯とそこに描く細い線の数を一定に決め、その帯が潜ったり、浮いたり、互いに編まれたりの要領で、一定域の中で行われるには尺度の存在、設計図的手順と云った「基準」やもともとの「プラン」がなければ出来まいと思うのである。案の定裏面にはそうした手順、ラフプランを物語る痕跡が残されていた。アウトラインを描き、どこから、如何なる手順を経て線刻したかとか、使った鑿の幅まで、石から聞き出すように分ったのである。

私の心をもっと揺さぶり驚かせたのは、われわれ日本人の「繊細でファジー」という特質は、この時代の人々にはすでに備わっているということである。

殆どが最新の設計と細心の切削技術を駆使して超精密に作られている一方で、何か所かで意外な曖昧さを垣間見せているのである。

例えばこれだけ丹念に成形して文様を刻んでいるのに、岩の瘤など取り除くこともない。そのまま生かして瘤表面に線刻したり、また細線の数やクロスする位置、幅がどう見ても誤っている場所もそのままとしたあいまいな仕事も愛嬌のように残していたりしている。まず石ありきで、相応しい自然石を、願いを託する大切な対象物として定めたら、瘤と云えども人の手で

切り離すと云うことは決してしてはならないタブーであったのかも知れない。

今日の日本人の気質はすでに吉備の国の弥生時代には出来ているとすれば、千七百年の時空を越えてわれわれと彼らの精神的な隔たりは一気に短縮してしまいそうである。

- 【註1】 元々楯築遺跡の上には楯築神社があったが、明治の合祀で鯉喰神社に統合された。しかし大正11年に福田海によって再び楯築に戻り、元あった場所から少し北側に現在の祠が作られ、施帯文石はここに収まった。そして今は墳丘から離れた現在の場所に納められている。
- 【註2】 海外との関連性を調べることも、この謎に迫る1つの方法であることは云うを待たない。しかし今のところその密接な関係も私はまだ掴んでいない。しいて直孤文として若干の関連性があると云えば、ボルネオのコナキタバルで見た割竹形木棺の縁に刻まれたものや揚子江流域出土の漆器くらいである。その漆器面一杯に、上になり、下に潜ったりしている蛇のようなものが無数に刻まれたもので、もしや施帯文石のモチーフかとも思われるような紀元前のものを本で見たくらいである。蛇は寄り集まって冬眠し、春には生き返るように冬眠から醒めて地上に出てくるが、その様を古代人は死者の再生への願望に結びつけたものであろう。
- 【註3】 線刻があるが、それは蛇の目にもある類のもので、その線刻が帯の一部とは思われないのである。
- 【註4】 このような違いは何を意味するのであろうか。そもそも渦巻きと云うのは自然界から取り入れたであろう。水の流れから、永遠の流れへ、人々の希求する永遠の絆、連帯を表わすものであった可能性もある。裏面、側面、表面が、それぞれ一重、二重、三重となっているのも、地下、地上、天上へと昇る絆の強さの階梯的違いを捉えたものかも知れない。そうなる次論文（安養寺所蔵岡山県指定重要文化財陣太鼓の基本的・時代的特徴と文様復元）の三ツ巴文の意味も日本人の中心的世界観が「天・地・人」の三要素として捉えられていることと深く繋がっている。